

倉敷市埋蔵文化財調査年報 2

—1992年度—

1993年9月

倉敷市教育委員会

序

岡山県南部に位置する倉敷市は、おだやかな瀬戸内海に面し、美しい自然とともに多くの文化財が残されてきました。

しかしながら、近年倉敷市においても、道路建設や宅地造成等の大規模な開発計画が進められており、多くの埋蔵文化財がその保存の危機に直面しております。こうした開発との調整を図りながら、市内の遺跡の保護保存を行っていくことは、倉敷市における文化財保護行政の重要な施策のひとつであります。

こうしたなか、平成5年4月には、かねてより建設を進めておりました倉敷埋蔵文化財センターが開館いたしました。当センターは、倉敷市における埋蔵文化財保護の拠点施設として、また調査研究のみならず広く生涯学習に寄与するための開かれた施設として、市民の大きな期待が寄せられているところです。

このたび発刊いたしました『倉敷市埋蔵文化財調査年報2』は、市民各位のご理解ご協力のもとに実施しました、平成4年度の埋蔵文化財調査の成果を少しでも早く多くの方々に公開するためのものであり、昨年度に続き今回が2集目となります。

ご高覧いただき一層のご指導ご協力を賜りますとともに、この小冊子が今後の文化財保護行政の一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、調査にあたりご指導ご協力をいただきました関係のみなさまに厚くお礼申し上げるとともに、今後ともより一層のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

平成5年9月

倉敷市教育委員会

教育長 山田錦造

例　　言

1. 本書は、倉敷市教育委員会が1992年度に行った埋蔵文化財保護行政の概要についてまとめたものである。
2. 発掘調査は、倉敷市教育委員会文化課職員福本明・鍵谷守秀・小野雅明・藤原好二・中野倫太郎・片岡弘至が担当した。
3. 本書の執筆は各調査担当者が分担して行い、それぞれ文末に文責者を記した。全体編集は鍵谷が行った。
4. 出土遺物の整理は文化課分室で行い、整理にあたっては、浦邊美紀子・内田智美的協力を得た。
5. 本書の高度は海拔高であり、遺構図の方位は磁北である。
6. 第1図で使用した地形図は、倉敷市発行の50,000分の1の都市計画図を縮小したものであり、その他のものは倉敷市発行のものを複製又は縮小したものである。
7. 本書に関する実測図・写真・遺物等は、すべて倉敷埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

序 文

例 言

1992年度事業の報告 1

1992年度調査一覧表 写真1 倉敷埋蔵文化財センター

第1図 調査地位置図

確認調査報告

上東遺跡確認調査報告（上東8号線） 5

第2図 調査地位置図 写真2 トレンチ1

第3図 トレンチ配置図 写真3 調査風景

西元浜貝塚確認調査報告 7

第4図 調査地位置図 写真4 トレンチ2北壁断面

第5図 トレンチ配置図 写真5 トレンチ11北壁断面

写真6 トレンチ12北壁断面

上東遺跡確認調査報告（上東128号線） 10

第6図 トレンチ配置図

福南山遺跡確認調査報告 11

第7図 トレンチ配置図

酒津－水江遺跡確認調査報告（公園建設） 12

第8図 トレンチ配置図

酒津－水江遺跡確認調査報告 13

第9図 トレンチ配置図

藤戸地内文化財調査報告 14

第10図 調査地位置図 写真7 土層断面（トレンチ4）

第11図 寺崎山古墳地形測量図 写真8 葦石（トレンチ9）

第12図 トレンチ9出土遺物 写真9 葦石（トレンチ10）

第13図 経寺山1号墳地形測量図 写真10 葦石（トレンチ11）

写真11 葦石（トレンチ12）

写真12 葦石（トレンチ14）

写真13 葦石（トレンチ15）

発掘調査報告

矢部寺田遺跡発掘調査報告 19

第14図 調査地位置図

発掘調査概要

王子ヶ岳浜遺跡発掘調査概要 20

第15図 調査地位置図	写真14 遺跡遠景
第16図 遺物出土状況図	写真15 遺物出土状況
第17図 ナイフ形石器	写真16 調査風景
第18図 尖頭器	写真17 現地説明会風景

1992年度事業の概要

倉敷市における埋蔵文化財に係る業務は、教育委員会文化課文化財係で取り扱っており、埋蔵文化財担当の学芸員は、1993年度開館予定の埋蔵文化財センターの開設に備え2名増員され、6名となった。1992年度の調査は、発掘調査2件、遺跡確認調査7件、立会調査26件を実施した。調査の内容及び詳細については、本文を参照されたい。

倉敷市においては、その開発面積が1,000m²を越える開発については、教育委員会文化課への合議が必要となっており、当年度は72件の申請があった。このうちの多くは、いわゆる分譲住宅等の宅地造成であり、これらは主に市街地周辺の水田地帯に盛土をして行われるもので、近世以降の干拓地の多い倉敷市の場合、こういった開発事業が遺跡にかかる例は、他地域に比べて少ないと見える。しかしながら、大規模な宅地造成等を行う場合は丘陵地が対象となり、今回の報告の中にもある藤戸地内の調査例のように複数の遺跡が含まれていることが多く、その保存について慎重な対応が必要なことは言うまでもない。

倉敷市では、1975年に『倉敷市文化財分布図』が刊行されており、從来これをもとに保存協議等を行っている。しかしながら刊行以来17年以上が経過しているため、道路や地形等が大きく変わっていたり遺跡の増減などもあって、対応に支障ができつつある。このため、当年度より5ヶ年計画で分布図の改訂を行うこととし、まず初年度として、主に玉島地区の分布調査を実施した。

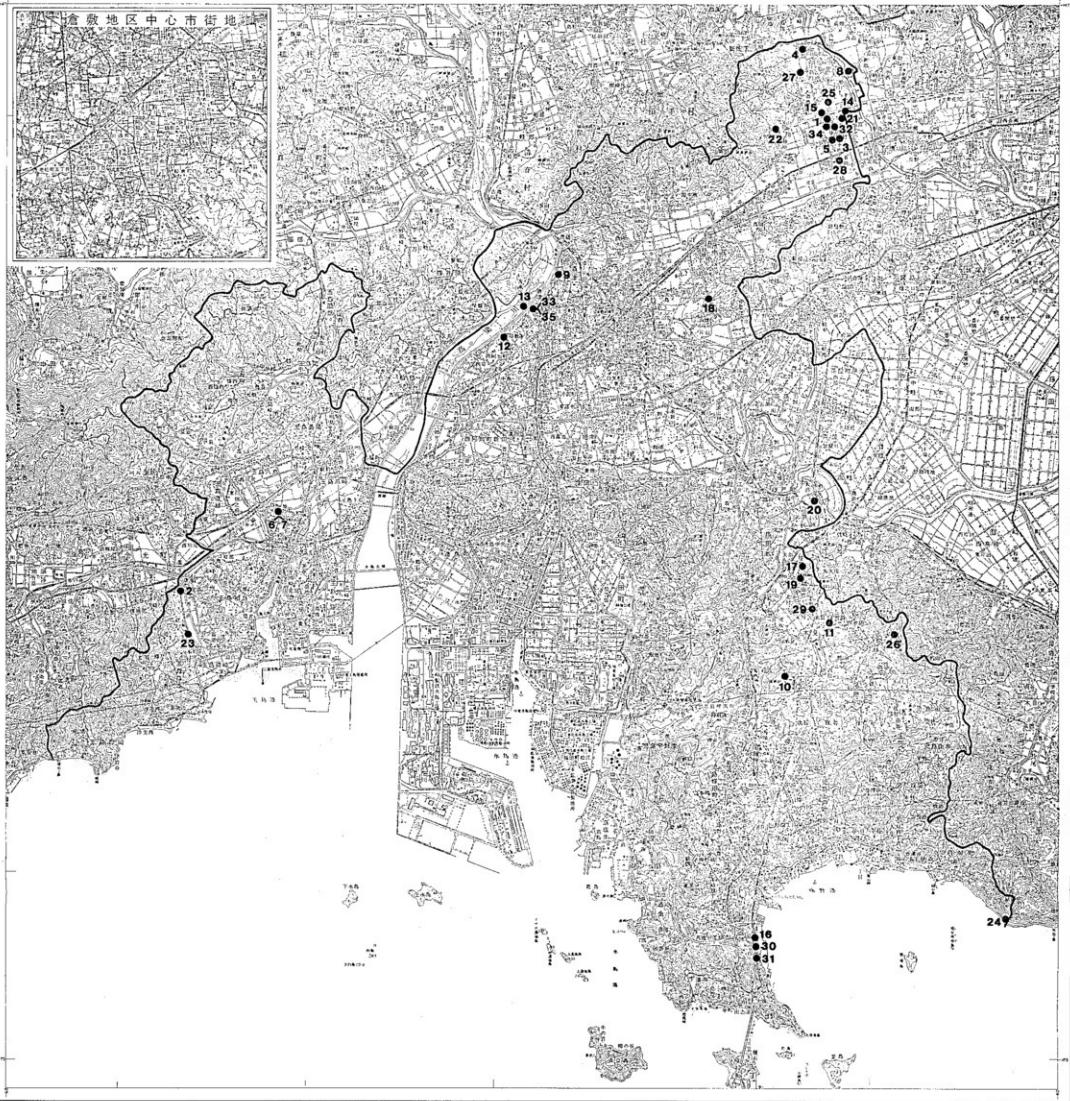
文化財保護の啓発・普及活動としては、一般市民向けに『倉敷市文化財だより第9号』を刊行するとともに、昨年度に続き、秋の文化財保護強調週間にあわせて市役所市民ホールで「くらしきの文化財展」を開催した。また、従前より懸案となっていた埋蔵文化財センターの建設については、新市発足20周年として、生涯学習施設であるライフパーク倉敷の敷地内に建設されるはこびとなり、1993年3月25日に落成式が取り行われた。倉敷埋蔵文化財センターは、倉敷市における埋蔵文化財保護行政の拠点施設として、また生涯学習施設のための施設として広く市民から期待が寄せられているところである。なお、従来文化課文化財係で行っていた、開発協議等の埋蔵文化財に関する業務は、1993年度よりすべて当埋蔵文化財センターで一括して行うこととなった。



写真1 倉敷埋蔵文化財センター

1992年度調査一覧表

No.	遺跡名	調査地	調査原因	区別	調査期間	遺物・遺構の有無
1	上東遺跡	上東字才ノ元	道路改良	確認	92.4.27~5.2	弥生土器他
2	西元浜貝塚	玉島黒崎	農道改良	確認	5.7~12	縄文土器他
3	上東遺跡	上東字新屋	宅地造成	立会	5.15	遺物・遺構無し
4	矢部寺田遺跡	矢部537-1	浄化槽埋設	発掘	5.19~26	縄文・弥生土器他
5	上東遺跡	上東字神光寺666-1外	道路改良	確認	7.1~2	遺物・遺構無し
6	飛越貝塚	玉島八島290-2番地先	水道管理設	立会	8.17	遺物・遺構無し
7	飛越貝塚	玉島八島290-2番地先	下水道管埋設	立会	10.5	遺物・遺構無し
8	日畑橋遺跡	日畑1038番地先	水道管埋設	立会	10.19	遺物・遺構無し
9	酒津一水江遺跡	酒津2825	公園施設造成	立会	11.10	遺物・遺構無し
10	稻南山遺跡	尾原宇福南山2956-1.5	土砂採取	確認	11.16~17	遺物・遺構無し
11	正無田遺跡	木見1277番地先	道路改良	立会	11.18	遺物・遺構無し
12	酒津一水江遺跡	西阿知町335-1外	公園建設	確認	11.18~25	中世土器他
13	酒津一水江遺跡	水江地先	遺跡範囲確認	確認	11.30~12.11	弥生・中世土器他
14	岩倉遺跡	日畑26-4外	水路改修	立会	12.1	遺物・遺構無し
15	上東遺跡	上東512-1番地先	水路改修	立会	12.4	遺物・遺構無し
16	阿津走出遺跡	児島阿津1丁目地内	下水道管埋設	立会	12.7	遺物・遺構無し
17	新熊野山遺跡	林88-1番地先	コンクリート舗装	立会	12.8	遺物・遺構無し
18	黒崎貝塚	黒崎479~532番地先	無効改修	立会	12.9	遺物・遺構無し
19	新熊野山遺跡	林687番地先	水路改修	立会	12.11	遺物・遺構無し
20	藤戸町地内遺跡	藤戸町藤戸字經寺地内	宅地造成	確認	12.14~93.1.13	古墳2基・埴輪他
21	上東遺跡	上東地内	水路改修	立会	12.21	弥生土器
22	御堂奥岩部奥池東遺跡	二子字岩部奥1794外	池の堤体改修	立会	12.22	遺物・遺構無し
23	中津貝塚	玉島勇崎124.125番地	池の堤体改修	立会	93.1.6	遺物・遺構無し
24	王子ヶ岳浜遺跡	児島唐琴町	保養所改築	発掘	1.7~3.29	旧石器他
25	上東遺跡	上東52-1番地	公園建設	立会	1.13	上器細片
26	赤尾池遺跡	木見2495番地先	水路改修	立会	2.8	遺物・遺構無し
27	矢部伴龍軒遺跡	山地586-4番地外	送水管埋設	立会	2.10	遺物・遺構無し
28	上東遺跡	下庄地内	道路改良	立会	2.15	遺物・遺構無し
29	下木見遺跡	木見819番地	池の堤体改修	立会	3.1	遺物・遺構無し
30	阿津走出遺跡	児島阿津1丁目80-11	下水ポンプ場整備	立会	3.4	遺物・遺構無し
31	阿津走出遺跡	児島阿津2丁目地内	下水道管埋設	立会	3.5	遺物・遺構無し
32	上東遺跡	上東326-1番地先	水路改修	立会	3.10	遺物・遺構無し
33	酒津一水江遺跡	水江148-6番地先	道路改良	立会	3.12	遺物・遺構無し
34	上東遺跡	上東523~5367番地	無効改修	立会	3.17	遺物・遺構無し
35	酒津一水江遺跡	水江578-1~585外	水路改修	立会	3.18	弥生土器片



第1図 調査地位置図 ($S = 1/100,000$)

上東遺跡確認調査報告（上東8号線）

遺跡名 上東遺跡
調査地 倉敷市上東字才ノ元（第1図1）
調査期間 1992年4月27日～5月2日

今回の確認調査は、1991年度に事前協議がなされないままに工事が行われた上東8号線について、工事完了後改めて全施工区域を対象として行ったものである。調査は総延長約140mの間に、2m×2mのトレンチを4ヶ所、0.5m×2mのトレンチを1ヶ所設定して行った。

遺構としては、トレンチ1においてピット3基・土壙1基、トレンチ2においてピット1基・土壙1基を検出した。これらの遺構は旧耕作土下約15cmで検出されたもので、いずれも田畠の地下げによりその上部を削平されており、また、土器もほとんど含まれていないため、性格等については明らかではないが、おおむね弥生時代のものと思われる。トレンチ3～5



第2図 調査地位置図 (S = 1 / 5,000)



第3図 トレンチ配置図 ($S = 1/1,000$)

においては、遺構は検出されなかった。

遺物としては、弥生土器と少量の中世土器が出土したが、いずれも小片であり図化できるものはなかった。弥生土器の多くは旧耕作土から出土しているが、トレンチ1～4では旧耕作土の下にみられた黄褐色土からも少量出土している。弥生土器をわずかに含むこの層は、安定した生活面が形成される以前の沖積層と考えられる。

1991年に行った上東8号線の立会調査では、トレンチ2の付近で土壌2基が検出されている。また、トレンチ1において確認された弥生時代の基盤層である黄灰褐色土は、トレンチ3では黄褐色砂質土、トレンチ5では暗青灰褐色へと変化することが認められた。これらのことから、今回の調査地は南北に延びる微高地の縁辺部にあたり、その境界をトレンチ2とトレンチ3との間に想定できると思われる。(鍵谷)



写真2 トレンチ1



写真3 調査風景

西元浜貝塚確認調査報告

遺跡名 西元浜貝塚

調査地 倉敷市玉島黒崎地内（第1図2）

調査期間 1992年5月7日～12日

西元浜貝塚は、倉敷市の西端部に位置する縄文時代を主とする貝塚で、古くは昭和27年刊行の『古備考古』84号にその記録がみられる。^①貝塚は小丘陵の東斜面に位置しているが、果樹園の造成により、現在ではその一部が表面に露出しているのみで、貝層の規模・残存状況については明らかではない。

1991年11月、丘陵の裾を南北にぬける農道の拡幅工事が、玉島支所産業課によって計画された。現農道は貝層露出部分の西約15mの位置にあり、貝層自体には直接影響はないと思われたが、「倉敷市文化財分布図」における西元浜貝塚の範囲のはば中央を通っており、また、周辺に縄文時代の遺跡が存在する可能性であることから、拡幅部分を中心に遺跡の範囲確認調査



第4図 調査位置図 ($S = 1/5,000$)



第5図 トレンチ配置図 ($S = 1/1,000$)

を行った。なお、この農道に接して西元浜古墳と呼ばれる石組みがあり、 \oplus 拡幅により影響を受けることが予想されたため、当古墳についても確認調査を実施することとなった。

[西元浜貝塚]

拡幅部分を中心に、10ヶ所のトレンチを設定して調査を行った。遺跡にかかる農道の北半分は段々畑となっており、その平坦部にトレンチ1～4・11の5ヶ所を設定した。これらのうち、トレンチ2及び11で縄文時代の遺物包含層を確認した。縄文土器とサスカイト片を含むこの層は厚さ約10cmで、トレンチ11の西端でその始まりが確認され、トレンチ2では東へ行くに従い厚さが薄くなり、東端ではその一部がとぎれていた。また、トレンチ1から11にかけては浅い谷が北から南へ延びておる、これに伴い包含層も、北から南へ向けて緩やかに傾斜しながらその厚さを増していた。したがって、縄文時代の遺物包含層は浅い谷状の凹地に堆積したもので、トレンチ2から11にかけてのあたりから始まり、本来は南へ向かって延びていたと思われるが、トレンチ2・11以南については段々畑の造成によってすでに



写真4 トレンチ2北壁断面



写真5 トレンチ11北壁断面

削平されていることが明らかとなった。

農道の北半分は果樹畠となっており、トレンチ5・6・8～10の5ヶ所を設定した。いずれのトレンチも、耕作土及び造成土と自然堆積土からなっており、遺跡に伴う遺物は全く出土しなかった。

〔西元浜古墳〕

現状では果樹園の平坦地に、残存する天井石一枚が完全に露出し、これを支える側壁らしき石材数個の上面がわずかに確認できるのみで、石室の規模や墳形・全長等については全く不明である。

現存する天井石のすぐ北側、奥壁の背後にあたる部分にトレンチ7を設定した。

耕作土の下には、果樹園の造成によと思われる擾乱土が何層か認められ、地表下約60cmで赤灰褐色の地山となる。また、確認できる東側壁は2個あるが、この南側の石材に接してすぐ南にトレンチ12を設定した。土層の状況はトレンチ7とはほぼ同じで、耕作土の下には3層の擾乱土が認められ、自然堆積土を1層はさんで、地表下約90cmで黄橙色の地山となる。

トレンチ7及び12からは、古墳に伴う遺物は全く出土しなかった。また、いずれのトレンチも石室の石材に接して設定したにもかかわらず、墳丘土等の古墳造成に伴う遺構も確認できなかった。さらに、トレンチ7では地表下60cm、トレンチ12では同90cmで地山が確認されており、この間で奥壁あるいは側壁を構築することはほとんど不可能と思われる。

したがって、これらのこととを総合すれば、これまで西元浜古墳として周知されてきたこの石組みを古墳であるとする理由は見当たらぬ。むしろ、トレンチ7・8・12の擾乱土又は地山の中に比較的大きめの岩が多く含まれていたことから、これらの石組みも露岩の集まりである可能性が強い。

(鍵谷)

註1 平田英文「三備地方貝塚集成概説（備中の部）」『古墳考古』84号 1952年

註2 『浅口郡誌』名著出版 1972年



写真6 トレンチ12北壁断面

上東遺跡確認調査報告（上東128号線）

遺跡名 上東遺跡

調査地 倉敷市上東字神光寺666-1外（第1図5）

調査期間 1992年7月1日～2日

当該調査は、市道上東128号線道路改良工事に先立ち、上東遺跡の範囲と性格を把握するため実施した。

調査地は、上東集落の南東端に位置する。平成3年度に、このすぐ北側において同工事に伴う立会調査を行った結果、遺物包含層と土壌1基を確認している。

調査は、工事区域内のうち、既存の道路敷地を除く部分（現況は水田）を対象とし、1m×1.5m程度のトレンチを3ヶ所設定して行った。各トレンチとも水田耕作土の下は、上から順に、鉄分・マンガンを含む粘質土層、砂層、砂混じりの粘質土層、有機物を含む粘質土層からなる堆積層がみられた。遺構および遺物包含層は認められず、最下層の粘質土層に大型のイネ科の植物遺体や昆虫遺体が含まれるが、人骨遺物の出土は皆無である。

以上のことから、当地区は微高地周辺の低湿地にあたると思われる。

（小野）



第6図 トレンチ配置図 ($S = 1/5,000$)

福南山遺跡確認調査報告

遺跡名 福南山遺跡

調査地 倉敷市尾原字福南山2596-1,5 (第1図10)

調査期間 1992年11月16日～17日

本調査は、福南山遺跡の範囲内で民間の業者による土砂採掘が計画されたため事前に遺跡の確認調査を行ったものである。



第7図 トレンチ配置図 ($S = 1/5,000$)

福南山遺跡は、主要地方道岡山・児島線の東側に位置する福南山の山頂に存在する遺跡である。遺跡の東側の地形は、以前から行われている土砂採掘工事により、大きく変化している。

調査は、トレンチを山頂から東斜面に尾根方向にたいし直角に3ヶ所、約30mの間隔において掘開した。3ヶ所のトレンチの層位はすべて、第1層が暗褐色腐植土の表土、第2層が黄灰色で礫を多く含む流土、第3層が黄褐色で礫を多く含む堆積土が認められた。各層には、遺物は全く含まれておらず、明確な遺構等も検出されなかった。

今回の調査地は、山頂付近で旧来からの自然地形を保っている地点であったが、いずれのトレンチからも遺物・遺構等遺跡の存在が確認できるものが検出されておらず、調査地付近までは遺跡の範囲が及んでいないものと考えられる。

(片岡)

酒津一水江遺跡確認調査報告（公園建設）

遺跡名 酒津一水江遺跡

調査地 倉敷市西阿知町335-1外（第1図12）

調査期間 1992年11月18日～25日

この調査は、西阿知第二公園の建設に伴い実施された。倉敷市が継続して行っている範囲確認調査によって、建設予定地の北西約200mの高梁川河川敷まで酒津一水江遺跡がひろがることが確認されている。また、建設予定地の北東約200mの地点では、昭和31年に岡山県南部上水道のろ過池工事に伴い古式土師器の包含層が確認されている。こうした付近の状況から建設予定地は酒津一水江遺跡の範囲内に入ることが予想された。

公園建設予定地の水田内に2m×2mのトレンチを7ヶ所設定し調査を行った。トレンチの地表下1m前後での間では、洪水砂が耕作土を複数回覆っていた。包含する遺物から、近世以降の洪水の痕跡であると判明した。トレンチ1、4～7では、地表下約1.5mでグライ化したシルトの層を確認した。この層からは中世の上器片（早島焼）が検出されており、形成は中世を遡らない。トレンチ1では地表下2.3mまで掘り下げたが、グライ化したシルト層は厚く、次の土層は検出できなかった。トレンチ壁面の崩落が激しく以下の掘削は諦めざるを得なかった。いくつかの層から中世土器、瓦片等が検出されたが、原位置をとどめない二次堆積物であった。

以上より、中・近世の微高地はこの地点にはおよんでおらず、当該時期の遺跡の範囲には入らないことが明らかになった。



第8図 トレンチ配置図 (S = 1 / 5,000)

トレンチ2では、地下0.7m、洪水砂の直下で畦畔状遺構が検出されている。遺構の性格を明らかにするためトレンチを拡張・追加したところ、1～1.5mの間隔で平行にならぶ畦畔状遺構が5条確認できた。作物は特定できなかったが、近代の農耕に関わる遺構であろう。（中野）

酒津-水江遺跡確認調査報告

遺跡名 酒津-水江遺跡

調査地 倉敷市水江786番地から酒津72番地先（第1図13）

調査期間 1992年11月30日～12月11日

酒津-水江遺跡の範囲確認調査は、高梁川河川敷に存在する遺跡の一部が流水等により年々損傷を受けているため、昭和53年度より継続的に調査を実施しているものである。平成4年度は、第15次の調査を行った。

調査対象地は、高梁川東岸、古水江渡しから上流約300mまでの河川敷である。昭和63年度に行った調査では、古水江渡しの上流約125m付近から下流へ約825mまで微高地が延び、この上に、弥生時代から中世にわたる遺跡が存在していることが確認されている。

調査は、2m×2mのトレンチを任意に10ヶ所掘開し、土層の確認に主眼をおいて行った。このうち、トレンチ9で古代～中世の遺物を含む青灰色粘質土層と、基盤層の直上において、弥生～古墳時代の遺物包含層である黒褐色粘質土層が確認された。この黒褐色粘質土層は、こ



第9図 トレンチ配置図 (S = 1 / 5,000)

れより上流側のトレンチでは遺物をほとんど含まない薄い層となっている。古代～中世の遺物を含む層は、トレンチ8・1・6でも確認された。

以上のことから、弥生～古墳時代の遺物包含層は古水江渡しから上流約50m付近まで認められた。また、古代～中世の遺物包含層は、それより150mくらい上流側に広がって分布していると考えられる。

(小野)

藤戸地内文化財調査報告

遺跡名 寺崎山古墳・経寺山1号墳・寺崎山南遺跡・藤戸東貝塚群G

調査地 倉敷市藤戸町藤戸字経寺地内（第1図20）

調査期間 1992年12月14日～1993年1月13日

この調査は、倉敷市藤戸町藤戸に計画されている住宅団地造成の予定地内の遺跡の範囲と性格の確認を目的として行った。調査対象となった遺跡は、寺崎山古墳・経寺山1号墳・寺崎山南遺跡・藤戸東貝塚群Gである。

〔寺崎山南遺跡〕

この遺跡が位置するとされた場所は寺崎山の山裾に近い傾斜地である。比較的なだらかな地点をえらび2ヶ所にトレンチを設定した（トレント1, 2）。これらのトレントでは2層の流土が確認された。遺構・遺物包含層は、トレント1で近現代の廃棄土坑が検出された以外は皆無であった。以上より、本遺跡はすでに流出あるいは削平により消滅していると判断した。



第10図 調査地位置図 (S = 1 / 5,000)

〔藤戸東貝塚群G〕

この中世貝塚が所在するとされた場所は、急な傾斜地の竹林である。地崩れ・掘削などによるのであろう、付近には崖状にえぐれた箇所が点々と認められる。このため、トレンチは設定可能な2ヶ所に設定するにとどめた（トレンチ20・21）。それぞれ地山まで掘り下げたが、遺構は検出できなかった。また、遺物も近現代のものに限られ、貝殻や中世の遺物等は検出されなかった。以上より、本遺跡は既に流出あるいは削平により消滅していると判断した。

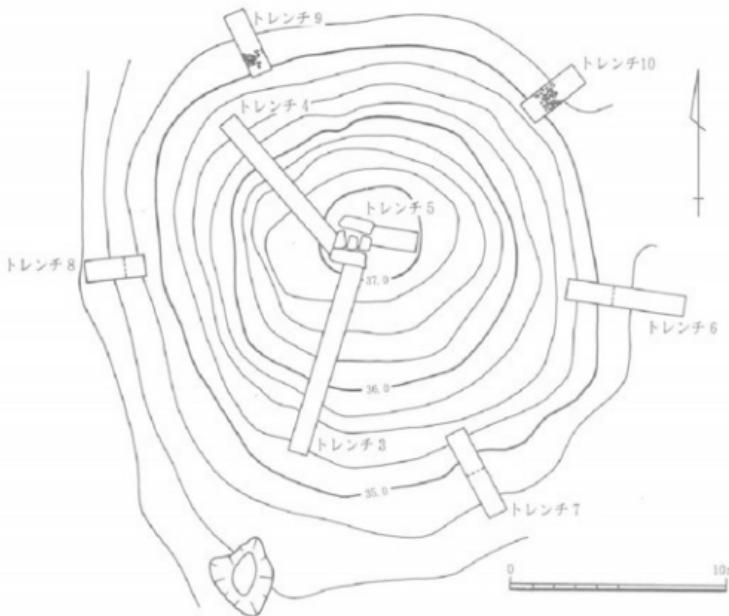
〔寺崎山古墳〕

寺崎山と経寺山からなる一連の丘陵はかつての藤戸海峡の南岸に位置しており、古墳時代には海上交通の要衝を望む岬であったと推測される。寺崎山古墳はこの丘陵南西方の寺崎山頂部に位置している。

現在残存するマウンドは高さ約1.5m、一辺約22mの隅丸方形を呈している。その頂部には



写真7 土層断面（トレンチ4）



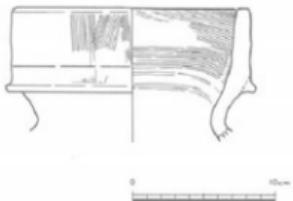
第11図 寺崎山古墳地形測量図



写真8 葦石（トレンチ9）



写真9 葦石（トレンチ10）



第12図 トレンチ9出土遺物

存在したことが判明し、同時に埴輪が確認できた。さらに、トレンチ9では流土内から角礫と混在する状態で土器の破片が検出され、このマウンドが古墳のものであることが確認できた。

トレンチ9の土器片から、壺の口縁部から頸部にかけての60%が復元できた（第12図）。口縁形態は複合口縁。外面の凸帯部より上部には縱方向のハケメの後にヨコナデが施されており、凸帯部より下部にはヨコナデが施されている。内面には横方向のハケメの後ヨコナデが施されている。凸帯は張りつけの後、ナデで整形されている。胎土は緻密で0.5~1mmの石英、長石を含み、赤褐色粒を少量含む。焼成は良好。器面の色調は5YR5/6、明赤褐色である。⁽¹⁾

5個の平石が組み合わせて置かれている。かつて小堂あるいは小塔がこの頂に設けられており、これらの石はその礎石として用いられていたと言われている。

この石組を中心にしてトレンチを放射状に設定し（トレンチ3~5）、主体部の有無、土層の状況等を確認した。

主体部の遺存は確認できなかった。すでに削平されているものと思われる。土層の状況は次のとおり。乱雑に積まれた盛土の下、頂部からマイナス約1.4mのレベルで、盛土を行った当時の旧表土がほぼ水平に広がることが確認された。さらに50~60cm下で地山が検出された。こうした土層の状況から、このマウンドが人為的に盛られたものであることが明らかになった。この盛土が墳墓のものであるのか、それとも小堂の建立にともなうものであるのか、その性格を確定するため、トレンチを追加設定した（トレンチ6~10）。

これらトレンチのすべてにおいて、マウンドの傾斜変換点付近から葦石に使用されていたと思われる角礫群が検出された。二次的に堆積した流土中のものがほとんどであったがトレンチ9・10では、原位置を保つものが認められた。これにより、埴輪をめぐる葦石が

認められた。これにより、埴輪をめぐる葦石が

墳端が2ヶ所でしか確認できなかったため墳形は確定できなかったが、測量図にあらわれた平面形から推測して方墳である可能性が高い。また、出土土器等から、古墳時代前期の古墳と考えることができる。

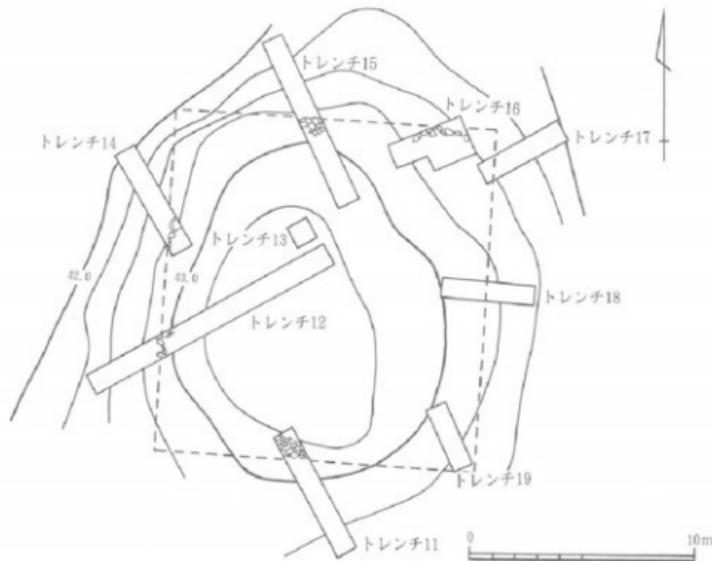
〔経寺山1号墳〕

丘陵北東の経寺山の山頂部に位置する。現状では、地形に微妙な高まりが認められるだけで明瞭なマウンドは観察できない。この高まりの中央部に設定したトレーナー12・13では、地表下約20cmで築成時の旧表土とおぼしき暗黄灰褐色土が検出され、さらに30cm下方で暗赤褐色の地山が検出された。こうした土層の状況より、人為的な盛土が行われていたことが確認できた。しかし、主体部の遺存は確認できなかった。主体部は盛土の上部と共にすでに削平されているようである。

また、トレーナー12の西半部では、葺石に使用された角礫群が検出された。墳端を確認するた



写真10 葺石（トレーナー11）



第13図 経寺山1号墳地形測量図



写真11 舟石（トレンチ12）



写真12 舟石（トレンチ14）



写真13 舟石（トレンチ15）

めに設定したトレンチのうち、トレンチ11・14～16において舟石が原位置を保って遺存しており、マウンドの端部が確定できた。遺物は流土中から土器の細片が少量出土したにとどまる。細かい破片のため時期の特定は不可能であった。

5ヶ所のトレンチで確認した墳端から推定できるこの墳墓の規模・墳形は、一辺15mの方形墳である。時期を特定しうるような遺物が検出できなかつたため、この墳墓が造られた時期は確定できないが、近接する寺崎山古墳と規模・形態的特徴が類似することから、ほぼ同時期のものと推定しておく。

〔まとめ〕

今まで前期古墳の調査例がなかった児島地区で、遺存状況は良くないものではあるが調査がなされた寺崎山古墳・経寺山1号墳は、この地域の墓制の変遷を知る上での貴重な資料と言うことができる。

また、これら2基の古墳の築かれた丘陵がかつて海を望む岬であったことは、先にふれた通りである。このような臨海性の類似・同規模の方形墳の例としては、邑久町通山の方形墳、香川県坂出市の千人塚古墳、同県詫問町吉吾古墳などがある。¹²⁾ 寺崎山古墳・経寺山1号墳の評価にあたっては、こうした類似性の背景を考えることが必要となるだろう。

(中野)

註1 『新版標準土色帖』1992年版による。

註2 岡鶴隆司・草原孝典「邑久町通山に所在する方形墳」「古代吉備」第11集 1989年

矢部寺田遺跡発掘調査報告

遺跡名 矢部寺田遺跡
調査地 倉敷市矢部537-1（第1図4）
調査期間 1992年5月19日～26日

矢部寺田遺跡は、市内北東部の倉敷市と岡山市の境界付近に位置する遺跡である。

本調査は、歯科医院の建築に伴い、医院内の浄化槽埋設部分について全面発掘調査をおこなったものである。調査は、2.6m×4mの浄化槽予定地を発掘した。

調査の結果、現在の地表下約20cmで中世の土器片を含む遺物包含層の最上面（にぶい黒褐色強粘質土）が検出され、この面の東北隅で黒色強粘質土で埋まっていた性格不明の落ち込みが確認された。この落ち込みからは、弥生土器と思われる小片が検出された。

また、この落ち込みの底部で直徑約20cmのピットが検出された。このため、調査区全体をこの面まで掘削したところ、調査区南西部分でもピットが検出された。これらのピットからは遺物は検出されなかった。



第14図 調査地位置図 (S = 1 / 5,000)

その後、50cmほど掘削を行い、調査区南壁断面を観察した結果、調査区の中央部分に幅1m前後の溝状の落ち込みが確認された。この溝からは、縄文時代晩期の土器を主体とし、弥生時代から中世までの土器片が検出された。その他サスカイト製の石鏃などの石器も数点検出されている。また、この溝を切る落ち込みもいくつか認められた。上記の溝および落ち込みは埋没した自然流路の痕跡と考えられる。当調査の出土遺物は、層ごとの明確な時期的序列は示していない。この調査区の堆積土は、遺跡の立地する扇状地の上方から流れてきたものである可能性が強い。

(片岡)

王子ヶ岳浜遺跡発掘調査概要

遺 跡 名 王子ヶ岳浜遺跡
調 査 地 倉敷市児島唐琴町1422-9（第1図24）
調査期間 1993年1月7日～3月29日

本調査は保養施設建設に伴い実施したものである。

遺跡は王子ヶ岳・新割山の南西山麓10～20m、斜面のわずかに緩やかになる場所に立地している。現地は標高がそれほど高くないにもかかわらず、旧石器時代には平原だった瀬戸内海を眼下に一望し、四国まで見通すことができる。また、北の新割山山頂付近には王子ヶ岳山頂遺跡、西を望めば堅場島遺跡・鷲羽山遺跡、東には宮田山遺跡など同時代の著名な遺跡が数多く点在している。

なお、1991年度に行った確認調査により遺跡は『倉敷市文化財分布図』に示された範囲より東北側に拡大しており、西方には広がらないことが判明している。今回は遺跡範囲と保養施設の造成範囲の重複する部分約400m²についてを調査対象とした。

樹木の伐採後、調査区内には平坦地と直径5mほどの掘削坑がみられた。平坦地についてはつい最近まで建物がたっていたそうで、これに伴って若干の造成がなされていた。また掘削坑については調査の過程で内部から花崗岩の薄い削片・鉄器などが検出されており、比較的新しい時期の石切りに関係したものと考えられる。

調査区の基本的な層序は造成土、流土層・マンガン層、白色粘質土層、基盤層である。



第15図 調査地位置図 (S = 1/5,000)



写真14 遺跡遠景

造成土、流土層中の遺物については層毎の取り上げを行った。ほとんどどの遺物はマンガン層中から検出されており、確認調査で二次堆積層と考えたのはこのマンガン層である。白色粘質土層は調査区東南部に部分的にみられただけだが、若干の遺物を出土している。これらの2層の遺物については1点づつ位置・高さを記載して取り上げた。各層については今後の分析に備えるため、少量の土壤サンプルを採集している。また、白色粘質土層の下の層を基盤層としたのは、非常に硬くしまっており遺物も含まれていなかったからであるが、保養施設建設のためのボーリング調査の結果を聞いたところ、地下13mまで堆積土だったそうである。調査区のなかは浅い谷が海に向かって下っており、マンガン層、白色粘質土層はこの谷の堆積土である。遺物が土砂とともに雨などによって谷のなかに流れ込んだ状況がうかがえる。また須恵器、弥生土器などは流土層中に比較的多く含まれており、



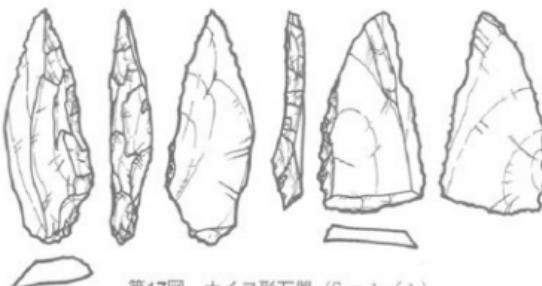
第16図 遺物出土状況図 (S = 1/200)

マンガン層の中からはあまり検出されなかった。しかしマンガン層の中でも石錐等が基盤層直上から出土するなどしており、旧石器時代の純粋な包含層は確認できなかった。遺構についてもまったく確認されなかった。

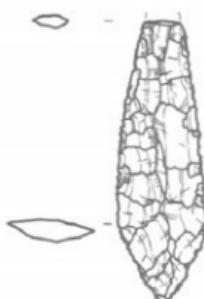
約900点の遺物は旧石器時代から古墳時



写真15 遺物出土状況



第17図 ナイフ形石器 (S = 1/1)



第18図 尖頭器 (S = 1/1)

代にかけての各時代のものを含んでいるが、大部分は旧石器時代の遺物である。以下に時代別の遺物の概要を説明する。

〔旧石器時代〕 一口に旧石器時代といっても各文化のものを含ん

でいる。縦長剥片のナイフ形石器1点、横長剥片のナイフ形石器17点、尖頭器5点、有舌尖頭器2点、スクレイバー11点、石核40点、剥片多数である。横長剥片のナイフ形石器には国府型とおもわれるものの他、宮田山型、井島型と呼ばれるものも含まれている。石材は黒曜石の尖頭器1点、凝灰岩の数点を除いてすべてサスカイトであるが、白色風化安山岩・ハリ賀安山岩等多様である。

〔縄文時代〕 早期の押型文土器（楕円文・山形文）が数点検出された。黄島式に属すると考えられるが、小片のみで器形のわかるものはない。サスカイト製石錐11点も検出された。

〔弥生時代〕 中期の土器底部、後期の製塙土器等が出土しており、付近に製塙集落が立地していたと考えられる。有茎石錐・スクレイバーなども出土している。

〔古墳時代〕 1975年発行の「倉敷市文化財分布図」には付近に王子ヶ岳古墳が記載されているが、今回の調査で関連する遺構などは検出されなかった。しかし、少量の須恵器が出土している。中村編年I型式4段階に属する甌とIV型式に属する壺、他3個体分である。（藤原）



写真16 調査風景



写真17 現地説明会風景

倉敷市埋蔵文化財調査年報 2
— 1992年度 —

平成5年9月31日 印刷発行

編集・発行 倉敷埋蔵文化財センター
〒712 岡山県倉敷市福田町古新田940番地
☎086-454-0600

印 刷 旭総合印刷株式会社 倉敷支店
